

問題①～⑩をときましよう。答えは、ご自分のノートや、用紙（なんでもよい）に記入して、次の登校の時に国語科 矢崎 に提出します。

【話す・聞く】課題 めあて↓聞いて話すために大切なことを考える。

国語係の鶴見さんが授業の連絡を聞きに先生のところに行きました。Aは先生から聞いた「次の授業の連絡」です。この内容は鶴見さんはクラスのみんなに、伝えなければなりません。Bは鶴見さんがみんなに伝えるためにしたメモです。

A B を読んで問題に答えなさい。



A 先生からの連絡

明日の国語の授業は、図書館の使い方や本の種類などを説明します。図書館に移動しておいてください。座席は、番号順に座っててください。持ち物は、四つです。国語のノートと黒のボールペン、ハンカチ、今あなたを読んでいる本です。読んでいる本はマンガや雑誌ではないものにしてください。

B 鶴見さんのメモ

- 明日 図書館に集合
- 図書館の使い方を見せてもらう。
- 持ち物
ノート ハンカチ
ボールペン 本

問題① 連絡を聞くときの大切なことからして合うものを次から三つ選びなさい。

- 1 聞き取れなかったり、分からないときは、質問して確認する。
- 2 メモをとり、内容を整理しておく。
- 3 メモは、すばやく書くために、重要なことだけを書く。
- 4 聞いたことだけでなく、自分で考えたことも伝えるとよい。

問題② B の鶴見さんのメモ内容は、先生の連絡が一部不足しています。不足している内容を赤ペンで書き入れ、メモを完成させなさい。

- 明日 図書館に集合
- 図書館の使い方を見せてもらう。
- 持ち物 ノート ハンカチ ボールペン 本

【読む】問題

めあて↓物語のあらすじを読み取る。登場人物の考えを読み取る。

次は、物語の一部分である。文章を読んで、後の問題に答えなさい。

仲間の一人である渡辺元道が、掃除の時間、「おりいって話がある」とめずらしくまじめな顔で私を教室のベランダへ連れだしたのだ。

「岸本。おまえ、星は好きか？」

「星って？」

「星は星だよ。夜空の星。好きか嫌いかな？」

「まあ、好きだけど」

適当に答えると、元道は「よし」と力強くうなずいた。

「では、一緒に①スターウォッチャーズをめざそうではないか」

「スターウォッチャーズ？」

「ま、星空案内人ってところかな」

元道は小鼻をふくらませながら説明を始めた。

うちの学校の天文部はこの夏、星空の観望会を計画している。八月の第二週を天文週間として校舎の屋上を開放し、一般の人々にも広く星と親しんでもらおうという計画だ。が、天文部の部員はわずか二名。何人集まるかわからないゲストを誘導し、望遠鏡の扱いかたや星の見方をレクチャーするには、いかにせんスタッフが少なすぎる。そこで、彼らは急ぎよ、助っ人を募集することに決めたのだ。

無論、ド素人では足手まといになるのが目に見えているため、志願者たちは放課後、四週間にわたる週三回の講習を受けて、天文部の先生から星のノウハウを仕込まれることになる。その講習を終えて、星空案内人にふさわしい知識を身につけた者のみが、栄えあるスターウォッチャーズの名前を手に入れるのだ！

と元道は熱くしめくくった。

「どうだ、岸本。正直に言ってくれ。おまえも一度はスターウォッチャーズなんて呼ばれてみたいだろ」

「スターウォッチャーズ、ねえ」

正直、どこかしら心くすぐられる響きではあった。天体。星団。銀河系。ああ、なんだかぞわぞわする。その広がりや瞬きのほんの一部を想像しただけでも、永劫なる宇宙の彼方へ頭がトリップしてしまう。

しかし、その永劫の前には講習という厳しい問題が立ちはだかっていた。

「いやだよ、私、講習なんて。」

「でも、なんで星なの？元道、星の興味なんかあったっけ」

「星じゃない」

ベランダの手すりに体を押しあて、元道は頭上をふりあおいだ。薄曇りの空にはおぼろな太陽の白い陰が浮かんでいた。

「②俺が求めているのは、宇宙のロマンだよ」

「わかった。私たちは星組でいこう」
こうして私たちはスターウオッチャーズへの第一歩を踏みだしたのだった。

最初はふしぎでならなかったが、受講を重ねるうちにだんだんわかってきた。必要か不要かなんていうのはそれこそ必要のない考えで、星好きというのは、とにかく星について語らずにはいられない人種なのだ。星にまつわることならなんでもかんでも、一分でも一秒でも長く、熱く、語りつくしたい。もつと星を知ってほしい。そして愛してほしい。そんな切なる思いが③ひしひしと伝わってくるのだった。

※「永遠の出口」より 一部変えてあります。

文章中の語句の意味

…天体のすがたや内部のようす、位置や運動を調べたり、研究したりする部活のこと。

永劫…いつまでも果てしないこと。

恰幅…腹や腰のあたりの肉付きから見たからだつきのこと。

精悍…たくましくてエネルギー感を感じること。

問題③ この物語に出てくる二人の人物の名字を答えなさい。

問題④ 線①「スターウオッチャーズ」と同じ意味で使われている五字を書きなさい。

問題⑤ 線②「俺」が求めているのは何か。

問題⑥ 線③「ひしひし」と同じ使い方をしている文を選び、番号で答えなさい。

1 猫がニャーニャーと鳴いている。

2 夜が明けだんだんと明るくなる。

3 彼の涙が目からぼとりと落ちた。

4 妹がようやく歩けるようになった。

問題⑦ この話に登場する人物についての説明として合うものを次の1～4までのなかから一つ選びなさい。

1 「私」は天文のことをよく知らなかったけれど、星好きな「元道」の誘いや熱意に引き込まれ、天文の講座を受講することになった。

2 「私」は天文部員として、この夏の展望会のために顧問の先生による天文の講座を受けた。受講を重ね、だんだんと星に魅了されていった。

3 「元道」は天文部員として、この夏の展望会のために、部員を集めることに必死であつた。天文に詳しく、講習を担当することになった。

4 「元道」は星好きであり、天文部員として栄えあるスターウオッチャーズと呼ばれたと思っっている。「私」はそんな彼をあきれている。

【読む】課題

めあて↓詩に込められている思いを読み取る。
詩の表現の特徴に気づく。

次の詩を読み、問題に答えなさい。

雨があがつて

雲間から

① 乾めんみたいにまつすぐな
陽ざしがたくさん地上に刺さり
ゆく手に榛名山が見えたころ

① 山路を登るバスの中で見たのだ、虹の足を。
眼下にひろがるたんぼの上に

② 虹がそつと足を下ろしたのを！

野面にすらりと足を置いて

③ 虹のアーチが軽やかに

すつくと空に立つたのを！

その虹の足の底に

④ 小さな村といくつかの家が
すつぱりと抱かれて染められていたのだ。

それなのに

家から飛び出して虹の足にさわろうとする人影は見えない。

⑥ おーい、君の家が虹の中にあるぞオ

乗 客たちはほおをほてらせ

野面に立った虹の足に見とれた。

多分、あれはバスの中の僕らには見えて

村の人々には見えないのだ。

⑦ そんなこともあるのだらう

他人には見えて

自分には見えない幸福の中で

格別驚きもせず

幸福に生きていることが⑧

「虹の足」より（表記を一部改めた）

- 問題⑧ ①～⑤には、それぞれ表 現技法が用いられています。もっともよいものを次から 選び、番号で答えなさい。(同じ番号を二度用いてもよい。)
- 1 ぎん法 人間以外のものを人間にたとえる方法
- 2 とうち法 語句の順番を入れかえる方法
- 3 直ゆ(明ゆ) 「～のように、みたいに」をつかって明らかに示す方法
- 4 反復法 同じ語句をくり返す方法
- 5 隠ゆ(暗ゆ) たとえるものを直接結びつける方法

問題⑨ ⑥「おーい、君の家が虹の中にあるぞオ」とありますが、これはどのような気持ち がふくまれていますか。もっともよいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- 1 虹をさわりに早くみんな自分の家から飛び出してこいよ。
- 2 虹の足みたいに危ないものが君の家を取り囲んでいるよ。
- 3 雨が上がって空には乾めんみたいな陽ざしがでているぞ。
- 4 雨上がりの虹が一番きれいに見えるのは君の家からだぞ。

問題⑩ ⑦「そんなこともあるのだろうか」とありますが、そんなこととはどのようなこと をさしているのですか。詩中から四十字程度で探し、初めの三字を書き抜き (文字を変えたりしないで本文のまま書くこと) なさい。

- 問題⑪ ⑧の部分には文が省 略されている。次の中から、もっともあうものを選び、番号 で答えなさい。
- 1 大切だ
- 2 見えない
- 3 あるのだろう
- 4 そうなのだ